

■肢体不自由のある子どもたちへの実践事例

「役になりきろう!」劇学習での活用

東京都立墨東特別支援学校

生井恭子

はじめに

都立墨東特別支援学校は、肢体不自由教育部門（東部療育センター内分教室を含む）・病弱教育部門（国立がん研究センター内にある、いるか分教室や聖路加国際病院など近隣の病院に入院中の児童・生徒）までの小学生から高校生が在籍する特別支援学校です。子どもたちの障害・発達や病気には個人差があります。また、日常的に医療的なケアが必要な子どもたちも在籍しています。

墨東特別支援学校内の読書環境は、学校図書館と1、2階の渡り廊下にある図書コーナーの計3か所あります。子どもたちは、移動中やちょっとした時間に本にふれることができる環境です。マルチメディアDAISY図書は、学校用のタブレット端末や図書館内にあるノートパソコンで再生すると見ることができます。

今年度は、小学部1年生が医療的なケア中に熱心にマルチメディアDAISY図書で読書する様子も担任より報告を受けています。導入した当時と比べると、校内にあって当たり前の学習の道具になったことを実感しています。

活用実態と様子

(1) 学習グループの実態

今年度の活用事例は、小学部5・6年生の知的代替の教育課程の児童7名からなる学習グループです。

グループでは、友達同士のかかわりを軸にして、自分が思うこと・考えることを言語化できる子どもたちが半数以上在籍しています。言語化はむずかしくても、指さしなどで伝えようとすると子どももいます。また、伝えたいことは、黙っていたり、待たせずに「自分の言葉で伝える」ことを大切にしながら学校生活を送っています。

学習面全般では、思うこと・考えていることが行動や作品などに表現できると、達成感が溢れ出し、自尊感情が高まり、自信たっぷりの表情になります。しかし、思うようにならなかったり、予定通りに進まなかったりすると気持ちが薄れてしまい、やる気を失い、机に顔を伏せたまま時間が過ぎていって

しまう子どももいます。それでも、うまくいったときの達成感は高く、この「できた」「やった」の達成感を大事にしながら、日々授業を進めています。

(2) 学習について

本学習は、「国語・算数」の授業の一単位です。

国語・算数は、個々の実態、発達、学習経験に合わせた内容を取り入れた「個別学習」と、グループ全員で学習に取り組む「集団」の学習の2種類があります。

「個別学習」の国語では、文章読解、漢字、言葉など、算数は加減法、子どもによっては、九九や簡単な分数などを繰り返し、繰り返し積み重ねています。

また、国語・算数の学習の基礎になる提示されたものをよく見る・観察するなどの基礎を養うイラストの間違え探しなども学習に加えています。グループの中には2・3種類のカード分別や、目と手の協応をスムーズにする「型はめ」などの課題に取り組む子どももいます。

本研究「役になりきろう」の学習は、「集団」学習の一つです。（グループみんなで、学習するスタイル）集団学習の「劇学習」は昨年度も2回取り組んでいるので、子どもたちにとっては、どのような学習をするのかがわかり、「何役になろうか？」と作品を通して、

自分の世界を作り上げ、その世界を楽しみながら進む学習になっています。

昨年度は、『サラダでげんき』（角野栄子）、『にゃーご』（宮西達也）に取り組みました。

作品を選ぶポイントは3つです。

- ①登場人物がはっきりしていること
- ②繰り返しであること
- ③盛り上がりがあること

練習すれば、するほど子どもたちは盛り上がり、役に入れ込んで演じています。また、役になりきれるように、小道具を探したり、作ったりする様子もあります。出番の前後をよく読み、場面に応じた声の出し方を工夫し、自分自身で演出する様子もありました。

今回は、『ともだちや』（内田麟太郎）に取り組むことにしました。そこには、グループ内の友達関係にも気づいてほしいという担任の思いも入っています。



『ともだちや』絵本の表紙

マルチメディアDAISY図書を使って導入を

「わいわい文庫」の中に『ともだち』

が入っていたことを思い出し、学習スタート時にみんなで見ることにしました。いつもは、担任による読み聞かせからのスタートだったので、不思議そうにしている子どももいましたが、声優のメリハリのある声でのキツネやオオカミの声にびっくりしていました。マルチメディアDAISY図書の世界に引き込まれ、集中して見ていました。



3人で見ている写真

その後、担任による読み聞かせでは、マルチメディアDAISY図書で見て盛り上がった場面が印象深く残っているので、その場面を待っているような様子でした。また、声優による語り口は、自分が演じることを考えるきっかけにもなっています。

オオカミ役を演じた6年生の子どもは、「オオカミが牙をカチカチ鳴らして、ものすごく怒っている雰囲気を作るヒントになった」とうれしそうに言っていたことが印象に残っています。



この場面を再現するヒントになりました。

劇発表に向けて

プロによる役になりきるコツや声のバリエーションのヒントをマルチメディアDAISY図書から学び、何度も一人読みをして確認して、みんなで練習を繰り返しました。

本番は、いつもの教室ではなく、少し広めの教室で行うこととしたので、広さの確認もしました。また、校内でチラシを配ったり、貼ったりしてお客さんも呼びました。子どもたちは、役になりきれるか、お客さんがいるかななどを気にしながら練習を重ねてきました。ある子どもからは、テレビ（マルチメディアDAISY図書）で見た時のことを思い出すように、セリフの言い方を確認する様子もありました。



重要なナレーション役



クマ役になりきって、イチゴを…パクリ

まとめ

タブレット端末は、ゲームや動画アプリケーションを見る余暇の道具だったのが、マルチメディアDAISY図書の利用をきっかけに読書を楽しむ道具となりました。

本単元「役になりきろう」では、劇遊びをする際の導入に適していたこと

が、今回の学習で知ることができました。また、障害のある子どもたちにとっては、読み手が用意する本を読んでもらう側だった受け身の読書から、自分で作品を選んで、自分のペースで読むという本来の読書経験になるきっかけになると、改めてマルチメディアDAISY図書の良さを実感することができました。

マルチメディアDAISY図書が入ったタブレット端末があれば、さまざまなジャンルの本と出会い、自分のペースを守りながら、指一本で進めることができるのです。読書経験が少ない、障害のある子どもたちにとっては、魔法の道具となると感じています。今後もさまざまな学習や機会を通して活用していきたいです。

